

国語科学習指導研究委員会

一 研究テーマ 「対話を通して、表現や思考を深める授業づくり」

二 テーマ設定の理由

日頃の授業を振り返る中で、子どもたちが自分の考えを豊かに表現したり、自分の考えの根拠をもって書いたりできるようにするためにはどうしたらよいか話題になった。そのため、今年度は、対話的な活動を通して、自分の考えを形成したり、新しい考えを見つけ出したりできる国語科の授業を目指して、本研究テーマを設定した。

各委員の実践を基に、意見交換や情報交換をすることで、日頃の授業改善を目指して互いに学び合ってきた。国語学習の中で、対話的な活動を考えた時、文章との対話、自己との対話、他者との対話が考えられる。授業の中で対話的な活動を取り入れ、子どもたちの様子の変化を追いながら実践を重ねた。子どもたちが更に豊かな言葉で自分の考えを表現したり、書いたりできるような授業づくりを目指して研究を進めてきた。

三 研究の経過

各校の授業実践から研究を進めた。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域で工夫して対話的な活動を取り入れ、表現や思考の深まる授業づくりについて互いに学び合った。

回	月 日	会 場	内 容
1	5月1日(木)	教育会館	研究テーマ決定と年間計画
2	6月24日(火)	川辺小学校	日々の授業についての情報交換 対話についての情報共有
3	9月11日(木)	川辺小学校	中間報告 実践発表
4	10月22日(木)	丸子北中学校	授業参観と授業研究
5	11月17日(月)	川辺小学校	授業参観と授業研究
6	11月25日(火)	教育会館	1年間のまとめ 来年度の方向について

四 研究内容（各校の実践の要約と振り返り）

A 「話すこと・聞くこと」

◇対話を通して育む子どもたちの「話す力聞く力」～系統性を意識し、一歩ずつ高めていく授業づくり～

(川辺小学校)

1 研究動機

私は小学校第1学年の担任を受け持っている。何もかもが初めての体験となる1年生の学習では、「対話」の中で、子どもたちの意見や考えを聞き取り、やり取りの中で意見を深めていくことがとても大切だと日々の実践の中で痛感している。ただ「友だちと話してみよう。」と投げかけても、話し方がわからない、話す順序がわからないなどと子どもたちが感じていることがわかった。自分が思う以上に対話的な学習が効果的なものになるためには、話し方の型を覚え、段階的にできることを増やしていく

ことが大切だと感じた。そのため、年間の学習活動を振り返り、子どもたちの学習の様子からどんな話す力・聞く力が身についたのか価値づけていきたい。

2 学習活動の様子

(1) 単元名：「よく きいて はなそう」

学習活動 ペアでお互いのすきなことについて話す。

手だて 最初に教師と代表児童でモデリングをし、ポイントやお手本をやってくれた児童の良さを伝える。

子どもたちの様子 ○成果 ●課題

○積極的に自分の意見を伝えることができた。

● 相手の回答に対するレスポンスの語彙が少ない。

(2) 単元名：「わけをはなそう」

学習活動 好きな動物について、わけも一緒に伝え合う。

手だて 教師と児童でモデリング。よさを具体的に伝える。(わけが言えていたねなど)

子どもたちの様子

○積極的に自分のことも伝えつつ、友だちにも質問できた。

○質問すること自体に面白さを感じていた。

● 一度のやり取りで終わってしまうことがあった。

(3) 単元名：「みんなにしらせよう」

学習活動 夏休みの思い出について話し、話したことについて質問をする。

手だて 前単元や小活動として「ことばはっけんたい」をし、みんなの前で発表の経験を積む。質問ができた児童の様子を伝え、その姿を肯定的に認めていく。

子どもたちの様子

○質問することによって、より話が詳しく分かった。(こどもたちのふりかえりから)

○より詳しく知ることができるような質問を考える姿があった。

(4) 単元名：「どんなおはなしができるかな」

学習活動 教科書の挿絵を見て、友だちと交互に話し、一つの物語を作る。

手だて 最初に自分一人で文章を作り、友だちとのやり取りに向けて、自信をつける。短い文でお話を作り発表する機会を設け、楽しい雰囲気とやりやすい雰囲気を作る。

子どもたちの様子

○自分一人で作る経験を経て、どの子も楽しく参加できた。

○周りを楽しませたいという思いから、発表にも意欲的に参加できた。

3 成果と課題

○子どもたちは、文や挿し絵と対話をしたことでおじいさんになりきって気持ちを考えることができた。
また、班の仲間と考えを伝えあう場面では、「その考え面白いね！すごくいいね！」と認めたり、「もう少し自分も変えてみようかな」と自分の考えを直したり更新したりする姿がみられた。

●選んだ理由に前時までで考えた「おじいさんの気持ち」も加えて表現できるとよかった。教師（私）の発問や手立てに工夫ができるとよかった。

◇ 中学2年「仁和寺にある法師」の授業実践（真田中学校）

1. 学習問題：兼好法師になって、「〇〇中にある生徒」という題の文章を書こう
2. ねらい：「仁和寺にある法師」に登場する「少しのことにも、先達はあらまほしきことなり。」の一節を生かし、それに結び付けられるような自身の体験を、200字程度の文章にまとめる。
3. 支援：仁和寺にある法師の中で、「法師の失敗」として考えられることがらを一般化し、生徒が自身の生活体験と結びつけられるようにする。

法師の失敗	一般化
極楽寺・高良神社を石清水八幡宮だと勘違いする	目的の場所や物を勘違いする
年を取るまで石清水八幡宮を参拝していなかった	理想のタイミングを逃す
遠距離にある石清水八幡宮まで歩いて行こうとした	理想的でない手段を選ぶ
正確な場所を知らないのに1人で参拝しようとした	誰かの協力を得ずに1で行う

4. 対話活動：文章を書く最初の段階から、生徒が自由に移動し、生活体験の共有や、文章の推敲をし合えるようにした。
5. 成果と課題

○お互いの生活体験や、共通の出来事など、対話しやすい内容を設定したことで、よい題材を活発に出し合う姿が見られた。

●出来上がった文章を見せ合って推敲をし合う姿はあまり見られなかった。題材を提供してもらうのには対話が有効な手段となったが、書きあがるとそこですぐに手を止めて提出する姿も見られたので、「早く書けてしまう生徒」と「書くのが難しい生徒」の差を埋められるような対話活動を設定することが必要だと感じた。

C 「読むこと」

◇友との対話を通して、音読の変化が見られた子どもたちの姿（和田小学校）

1. 単元 「たぬきの糸車」（1学年）
2. 学習活動 音読劇にして2年生に発表しよう
3. 子どもたちの姿

音読を積み重ね物語を楽しそうに読む子どもたちであったが、自分の音読を更に工夫しようとする気持ちにはつながりにくかった。音読を聞き合い、お互いの良いところを見つけることはできるが、更に自分の音読を工夫しようという意欲にはつながりにくく、教師からの投げかけがどうしても多くなってしまうことに課題を感じていた。

「大きなかぶ」の音読劇に親しみ、全校の前で発表する機会があり、たくさんの人に見てもらえてうれしかった経験から、今回も2年生に音読劇を発表したいという願いをもって学習に取り組んだ。

劇にしていくなかで、自然と対話が生まれ、見てもらう人のことを意識ながら、お互いに意見交換をして音読を深めていく姿があった。間の取り方や、友達の動作化したことに対して文章から気づいたことをアドバイスしていた。またセリフも、文章通りに読んだ方がいいと主張する人と、役になった人が言いやすい言い方をした方が、気持ちが伝わると主張する人。自分の音読だけでなく、見ている人に楽しんでもらうにはどうしたらよいか考えて、工夫しながら音読劇が出来上がっていった。

4. 振り返り

少人数学級の良さを生かして、他学年へ目を向けることで学習の深まりが見られるようになった。子どもたちの願いから学習活動が始まったため、自然と対話が生まれ音読の表現も変わっていったように感じる。他者との対話を通して、新しい気づきを得て表現が深まることを実感した。

◇作品のおもしろさを考える子どもたちの姿（第五中学校）

1. 学習内容（様々な観点から、『ヒューマノイド』のおもしろさを語り合おう）
 - (1) 単元の学習のまとめとして、(1)作品の構成・展開 (2)登場人物 (3)言葉や表現 のうち、1人1つ観点を決め、選んだ観点から、作品のおもしろさを考える。ロイロノートに記入する。
 - (2) 記入したロイロノートを提出する。早く終わった人は別の観点でも考えてみる。
 - (3) 班で共有する。感想を伝え合ったり、疑問を投げかけたりする。
 - (4) 同じ観点を選んだ人で班をつくり、意見を共有する。感想を伝え合ったり、疑問を投げかけたりして、自分の思考を深める。
2. 成果（○）と課題（●）

○班で共有したことで、違う観点を選んだ人の意見を知ることができ、興味深そうに聞いている生徒が多かった。共有しているときに、「確かに！」「それってどういうこと？」「そこに注目したんだね。」などの声が聞こえた。自分が思いつかなかった意見を知り、思考が広がったようだった。

○同じ観点を選んだ人で班をつくり、意見を共有したことで、「伏線」や「機能」などの同じ部分に注目した人でも、面白さの理由が違うことに気づくことができていた。(3)言葉や表現の観点では、注目した言葉や表現が様々で、そのことに興味を惹かれている生徒がいた。

●考えの共有まではできたが、深い「対話」やそれによる「思考の深まり」までは到達できなかったように思う。

●感想を伝え合う姿は多く見られたが、疑問を投げかけている姿は少なかった様子だった。質問の仕方の例や、質問する時のポイントの例などを示しておけばよかった。

◇対話を通して思考を広げる(丸子北中学校)

「2年：クマゼミ増加の原因を探る 沼田英治」

中学校2年生は、日常の教科学習を通して抽象的な思考が飛躍的に伸びる時期である。だが、各生徒の言語生活の中に、それらの「足場かけ」となるような言語経験をえられる機会は生徒により違いがある。ゆえに国語の授業を「全員が」共通して言語経験をすることができる機会であると捉え、そこでの対話活動による級友の言葉を「足場」として、生徒自身が、自身の思考を言語化する活動を行う。

○第3時 小見出しを活用して読み取った内容を図で表す

○第7時 これまでの学習を基に、

図表の効果について確認する

The image shows a collection of student work. On the left, there are several hand-drawn diagrams and tables, some with arrows and boxes, representing the content of the text. On the right, there is a screenshot of a spreadsheet with handwritten notes in Japanese. The notes discuss the effectiveness of diagrams and tables in understanding text, mentioning that diagrams help in understanding the overall structure and relationships, while tables help in organizing data and identifying key points. The notes are written in a clear, legible hand.

○この教材をスタートとして、1人一台端末を活用し、さまざまな形で思考を言語化して共有する、ということを継続したことで、自分の感覚を言語化できる生徒が増えてきた。

●音声言語のみの共有だと、①複雑な内容を共有しづらい ②限定的な共有になってしまう ことが多いため、紙媒体も含めて一人一人が自身の考えを「書き表す」ことをデフォルトにすると、「考える時間」に加えて「書く時間」も設定する必要がある。そのあたりの時間や学習活動の組み方は、今後も検討していく必要がある。

◇共有ノートを使って発表し、新たな気づきや意味を読み解くことにつながっていった姿(城下小)

1. 単元名 国語『みの回りのものを読もう』(2学年)

本単元では、身の回りにある看板や標識が、読み手に何を伝えようとしているのかを工夫から読み解くことをねらいとし、対話活動を取り入れながら学習活動を行った。

2. 対話活動

(1) ロイロノートを使用した思考の可視化

授業の導入として、一人ひとりが教科書の写真をじっくりと観察し、気づいたことをロイロノートの共有ノートに書き込ませた。「色の工夫」「文の工夫」「絵の工夫」といった観点別に付箋の色を変えることで、思考の整理を促した。

(2) 共有ノートを活用した班での対話

同じ共有ノートを使用している班の友達同士で、お互いが書き込んだ気づきを発表し合った。同じ写真を見ている、着目するポイントが異なることに気づき、互いの意見に耳を傾ける姿が見られた。

(3) 全体交流を通じた学びの広がり

班ごとの話し合いで深まった内容を全体で共有することで、さらに多くの視点に触れることができた。「危険な場所は赤い色の看板が多い」という、共通の法則を見出す子や、友達の「看板を横向きで見たら口を開けて食べようとしている顔に見えた。波が呑み込もうとしていることを表している」という発想に驚き、新たな気づきや自分の考えを広げる姿、生活体験と結び付けていく姿が見られた。

3. 成果 (○) と課題 (●)

○最初は「色が赤い」「文字が大きい」といった単なる気づきだったものが、班や全体での対話を通じて、「この看板は危険を伝えている」「○○という工夫は、見る人に分かりやすいようにするため」といった、看板が持つ意味や意図へ思考が深まる姿が見られた。

○友達の考えを聞くことで、「自分とは違う見方がある」ということに気づいていた。「みんなの意見を聞いて、色々な看板に色々な意味や工夫があると分かりました」という感想があったが、対話が多角的な視点を得るきっかけとなった。

○「グループみんなで工夫しているところを見つけて発表するのが楽しかったです」「友達といっしょに話すのが楽しかったです。どうしてかというと、考えを聞いて楽しかったからです」という感想からは、対話は学習を「楽しい」と感じさせる原動力となったことが伺えた。

●対話を『深める』ための場面設定や子ども同士の思考のズレを意識した授業構想、また対話を活発化し考えを深めていくための対話スキルの向上の必要性も感じた。

●対話を活発にしたり、考えを共有したりする際の適切な ICT の使い方について、さらに考えていく必要がある。

◇読書へのアニメーションを活用した国語授業の実践(神科小)

「読書へのアニメーション」を国語の授業に取り入れることで、児童の読書意欲の向上と物語の理解度深化、ひいては主体的・対話的な学びへの貢献を目指した。

1. 学習内容

(1) 物語への導入と興味喚起

- ・物語の表紙やタイトルから内容を想像させたり、物語の一部を読み聞かせたりすることで、児童の興味を引きつけた。
- ・図書館の時間を活用し、読み聞かせ後に「アニメーション」の活動を行った。

(2) 物語の読み深めと対話活動

- ・物語の展開に合わせて、グループワークやペアワークを取り入れ、児童同士で意見を交換する機会を多く設けた。
- ・「登場人物の気持ちを想像する」「もし自分だったらどうするか」といった問いかけを通して、物語の内容を多角的に捉える活動を行った。
- ・絵本『ぐりとぐら』を用いた活動では、物語の中から意図的に間違った文章を提示し、正しい文章を思い出す活動を取り入れた。これにより、児童は物語を注意深く読み込み、細部まで理解しようとする姿勢が育まれた。
- ・絵本『100万回生きたねこ』を用いた活動では、物語から抜き出した文章を場面ごとに並び替える活動を行った。これにより、物語の構成や時間の流れを理解し、物語全体の構造を捉える力を養った。

2. 成果(○)と課題(●)

- 授業を通して、読書に苦手意識を持っていた児童も、物語の世界に積極的に関わるようになった。
- 物語の登場人物に共感したり、物語の結末について活発に意見を交わしたりするなど、読書への主体的な姿勢が見られた。
- 「アニメーション」の技法を用いることで、物語の表面的な理解に留まらず、登場人物の心情や物語の背景を深く読み取る力が養われた。
- 『ぐりとぐら』での「間違っている文章を見つける活動」は、精読力を高め、物語の細部への意識を促した。
- 『100万回生きたねこ』での「抜き出した文章を場面ごとに並び替える活動」は、物語の構造理解を深めた。
- グループでの対話活動を通して、多様な解釈に触れることで、物語への理解がより一層深まった。
- アニメーション技法の習熟：教師が「アニメーション」の技法を効果的に活用するためには、さらなる研修と実践の積み重ねが必要となる。

- 評価方法の工夫：児童の読書意欲や物語理解度の変化を、より具体的に評価するための方法を検討する必要がある。
- 他教科への応用：国語以外の教科においても、「読書へのアニメーション」の考え方を取り入れることで、学習活動全体の活性化を図る可能性を探る必要がある。

五 研究のまとめと課題

<成果>

- ・ICTを活用したり、グループの分け方を工夫したりすることで、自分の考えを他者と共有しやすくなり、伝えたいことがより明確になったり、新たな良さに気づいたりすることができた。
- ・他者との対話を通して、自分の考えに自信がもてるようになったり、より詳しく伝えたりしようとする気持ちにつながり表現が高まっていった。文章に戻って自分の考えを説明する姿もあった。

<課題>

- ・更に対話が活発になるためには、互いの考えや意見に質問ができるようになると良かった。
- ・表現が豊かになっていくためには、語彙を豊かにしていくことや、表現の良さに触れる機会が必要だと感じた。毎日の積み重ねの中で、語彙力を育てていくことを意識したい。
- ・思考力の深まり「思考の変遷」をどう捉え、評価するかが今後の課題として明らかになった。そのため、言語を手掛かりとして、どのように自分の思いや考えを広げていくのかを中心に、更に研究を深めたい。